

日本ギヤスケル協会

第 35 回大会

2023 年 10 月 8 日（日）13 時 30 分より 於・同志社大学今出川キャンパス 良心館 401 教室
〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入

13:30～13:35 開会の辞

日本ギヤスケル協会会長 大野 龍浩（立正大学教授）

総合司会 齊木 愛子（熊本大学非常勤講師）

13:35～14:05 研究発表

司会 遠藤 花子（日本赤十字看護大学准教授）

「ストーリーと歴史のあいだ——『シルヴィアの恋人たち』を読む」

猪熊 恵子（東京医科歯科大学准教授）

14:05～14:10 Break

14:10～15:50 シンポジウム

「ナショナルな物語としてのギヤスケル——統合と分断」

司会・パネリスト：金子 幸男（西南学院大学教授）

パネリスト：伊藤 正範（関西学院大学教授）

パネリスト：西垣 佐理（近畿大学准教授）

15:50～16:00 Break

16:00～16:30 総会

16:30～16:40 奨励賞表彰式

16:40～16:45 Break

16:45～17:45 講演

司会：杉村 藍（鳥取大学教授）

「『北と南』における〈高慢〉と〈偏見〉——オースティンとギヤスケル」

廣野 由美子（京都大学大学院教授）

17:45～17:50 閉会の辞

日本ギヤスケル協会副会長 閑田 朋子（日本大学教授）

*懇親会 18 時 30 分より 於・京都ガーデンパレス 会費 6,500 円

本大会に関する問い合わせ：日本ギヤスケル協会事務局 E-mail:ashizawa@shizuoka-eiwa.ac.jp

〒422-8545 静岡県静岡市駿河区池田 1769 静岡英和学院大学短期大学部 芦澤久江研究室

梗概

研究発表

「ストーリーと歴史のあいだ——『シルヴィアの恋人たち』を読む」

猪熊 恵子（東京医科歯科大学准教授）

1848年11月8日、トマス・カーライルはギヤスケルに書簡を送り、『メアリ・バートン』の出来栄を高く評価している。『英雄崇拜論』等で名を成した年長の歴史家/作家から寄せられた賛辞は、当然のことながら若き日のギヤスケルを大いに喜ばせた。本発表ではこの書簡を議論のきっかけとし、同時代的なテーマを扱う『メアリ・バートン』からキャリアをスタートさせたギヤスケルが、「歴史的題材」をどのように取り上げ、「英雄」的人物をいかに描いたかについて考えたい。そのため、特に『シルヴィアの恋人たち』に注目し、ジェルジ・ルカーチの歴史小説論やヘイドン・ホワイトの歴史記述批評を参照しつつ読み解いていく。また、あからさまに歴史的な事象を扱いつつも、情景描写や登場人物造形においてどこか牧歌的でおとぎ話的な雰囲気漂わせる『シルヴィアの恋人たち』に関して、その内部に見られるストーリー性と歴史性（しかし本発表はこれらが二分可能で相補的な形態だと考えるものではない）の混淆/交錯を跡付けながら、本作品を特徴づける歴史記述のありようについても考えてみたい。

シンポジウム

「ナショナルな物語としてのギヤスケル——統合と分断」

金子 幸男（西南学院大学教授）

「統合と分断」は現代の標語である。ギヤスケル夫人が生きた19世紀前半もそのような時代であった。18世紀、君主と議会を中心に統合されたブリテンは、革命とナポレオン戦争の時代、愛国心で一つになった。続く19世紀前半は統合と分断の時代、改革の時代である。都市化と工業化を生んだ産業革命により、異なる地域が結びつき経済的統合がなされた。それを推進したのが、道路、運河、鉄道、新聞・雑誌などであり、人、モノ、思想の移動が生じた。しかし統合の陰で社会階級の分断が生じていた。ディズレーリの二つの国民（金持ちと貧乏人）、マルクスのブルジョワと無産階級である。地政学的にも北（工業、革新）と南（農業、伝統）に分断された。分断は労働組合、チャーチズム、穀物法廃止運動を引き起こした。他方、統合志向の工場法（1830、40年代）、新救貧法（1834）等が制定された。宗教差別下の非国教徒、カトリック教徒は審査律廃止（1828）とカトリック解放令（1829）により、中流階級は1832年の選挙法改正によりネイションの一員となった。さらに健全な家庭像やチャリティ、合理的娯楽も社会の調和と統合に関係した。本シンポジウムは、ギヤスケル夫人が描いた統合と分断の社会を分析し、いかなるネイション像、ナショナルな物語を呈示しているのかを見てゆきたい。

『メアリ・バートン』における法廷の群衆と小説の語り——ネイションとの分断と統合」

伊藤 正範（関西学院大学教授）

『メアリ・バートン』終末部におけるリバプールの巡回裁判では、自ら殺人犯の汚名をかぶろうとしたジェムが、証言台に立つメアリの秘めたる愛の告白を聞き、遅れて登場したウィルのアリバイ証言によって最終的に絞首台から救われるという展開をたどる。小説が主軸に据えるロマンティックな関心と社会の支柱たる法的正義との統合が果たされているかに見えるこのフィクショナルな法廷は、しかし同時に、裁判の行方を見守る傍聴者たちの気まぐれな声を媒介として、さまざまな位相の分断が招き入れられる場でもある。とりわけ無罪判決を勝ち取ったジェムへと向けられる頑なな嫌疑のまなざしは、最終的に主人公たちがイングランドの外部へと離脱するプロットを加速する。本発表では、都市化の拡大とともに大衆の力が増大しつつある当時の社会状況を見据えながら、多様で揺れ動く社会的関心のネットワークのただ中において、小説の語りがどのように自らのポジショニングを模索しているかを探っていく。その過程で、ジョウゼフ・コンラッド『ロード・ジム』、E・M・フォースター『インドへの道』において描かれる法廷場面も参照しながら、小説と群衆、そしてネイションとの関わりについて、通史的な視点も取り入れながら分析を行う。

『ルース』は、孤児と家族・社会、レディと堕ちた女、国教徒と非国教徒、上・中流階級、法の順守と違背、ロンドンと地方など、統合と分断の種をはらんでいる。本発表では『ルース』を孤児の身で私生児を生んだ堕ちた女が、イングランド社会にレディとして統合されていく話として読めるのかどうかを探りたい。ルース・ヒルトンの統合は、リスペクタブルなホームと職業を見い出せるかどうかにかかっている。住み込みのお針子見習いをしていた仕立て屋も、青年蕩児ベリンガムと過ごした北ウェールズの宿屋も彼女のホームではない。エクルストンの町でルースは非国教徒の牧師ベンソンとその妹の家に同居し、牧師から教育を受け、子持ちの未亡人として、また名家の娘たちの家庭教師として地歩を築く。ベンソン家やエクルストン町がホームと言えそうだが、素性が知れると人々は彼女から遠ざかる。折からチフスが蔓延し、彼女は改悛の行為として看護師となり信頼を回復する。リスペクタブルなチャリティ行為によりレディとして町に統合されたかに見えたルースは、ベリンガムの看病がもとで感染し亡くなる。いったい本作品はイングリッシュなホームを見つけたナショナルな物語と言えるのだろうか。特にウェールズと海辺の保養地アバマウスの美しい自然、宗教的な改悛の情がこの読みにどうかかわってくるかにも触れたい。

『北と南』におけるジェンダー・イデオロギーの再構築

——マーガレットとソーントンとの関係を中心に——

西垣 佐理（近畿大学准教授）

『北と南』（1855）はその題名が示す通り、ミルトンとヘルストンという土地・社会階層・ジェンダーなど、様々な要素の分断から始まっている物語である。ヒロインのマーガレットは、中流階級に属しており、彼女が多くの経験を経て成長する際、分断された諸々の要素を仲介する役割を果たす。特に、マーガレットとジョン・ソーントンとの関係では、彼の男性性が、北部特有のセルフ・メイド・マンから、彼女の影響を受けて徐々に変化する。とりわけ、彼の「マスター性」は、作中の男性性構築を考える上で重要である。さらに、ソーントンの男性性再構築と併せて注目すべきは、近代社会における経済主体としての個人の誕生である。物語の終盤、マーガレットはベル氏からの遺産を受け継ぎ、投資先としてソーントンの事業を選び、救済の手を差し伸べようとする。これは、特に女性が経済力を手に入れ、男性と対等に意見を述べられる立場になったという点で、ギヤスケルが理想とするジェンダー・イデオロギーへと再構築されたと考えられるのではないだろうか。

本発表では、『北と南』におけるジェンダー・イデオロギーの再構築について、マーガレットとソーントンとの関係性の変化を中心に、風土・階級・親子関係・経済力などの観点を加味しながら考察していきたい。

講演

『北と南』における〈高慢〉と〈偏見〉——オースティンとギヤスケル』

廣野 由美子（京都大学大学院教授）

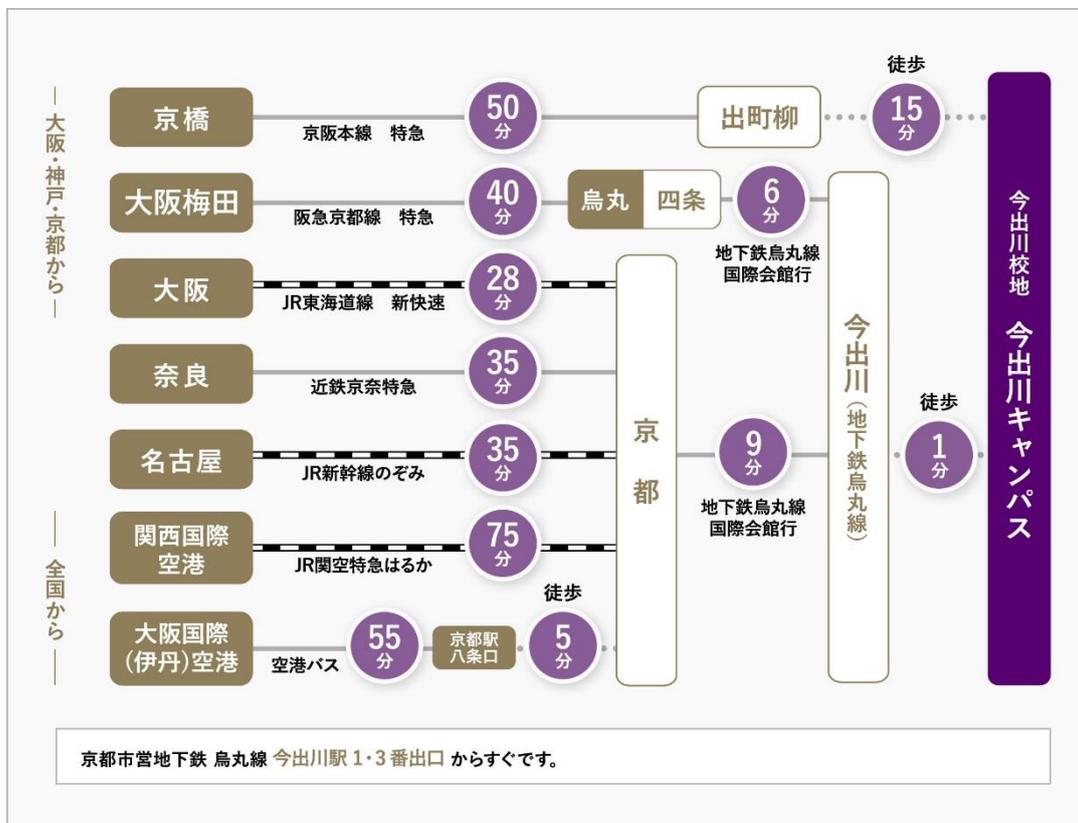
エリザベス・ギヤスケルの産業小説『北と南』は、ジェイン・オースティンの恋愛小説『高慢と偏見』とは、時代背景も、扱われている題材も、大きく異なる。「南」のヘルストンが象徴する土地を基盤とした階級社会は、オースティンの世界と共通するものがあるが、「北」のミルトンが象徴する産業社会は、オースティンの小説世界とはまったく風景が異なる。にもかかわらず、『北と南』を読むと、そこには紛れもなく、〈高慢〉と〈偏見〉によって対立しつつ惹かれ合う男女が、互いの誤解を解きながら成長していき、結婚に至るといったストーリーがくっきりと浮かび上がってくる。

そこで、〈高慢〉と〈偏見〉というキーワードを中心に、『北と南』のテキストを辿ってみる。具体的には、1) 出会いにおける〈高慢〉と〈偏見〉、2) 求婚の失敗、3) 誤解が生み出した〈偏見〉と苦悩、そして解決——という、物語の底流を成す共通テーマにそって、『高慢と偏見』と比較検討しながらギヤスケルの作品の特性を明らかにする。最後に、両作品の本質的な相違点を抽出することによって、そこに両作家の人生キャリア上の相違がいかんにか反映されているかについて、考察を推し進めたい。

アクセスマップ

大会会場

同志社大学今出川キャンパス良心館 401 教室 〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入



懇親会場

京都ガーデンパレス 〒602-0912 京都市上京区烏丸通下長者町上ル龍前町 605

